



カレブ通信

2013年4月28日

第21号

内容

- 1 各地「カレブの会」の予定
- 2 ミニ報告
「仙台カレブの会」
根田裕道
- 3 カレブ ストーリー 1
「変えられた一瞬」
東後勝明
- 4 カレブ ストーリー 2
「贖罪」 内田雄一



「カレブ ストーリーとは」

「今や私は、きょうでもう85歳になります。・・・

モーセが私を遣わした日のように、今も壮健です」

(ヨシュア記 14 章)と、信仰によって主の御心を成し遂げたいと願うカレブの熱い思いが「カレブの会」のスピリットです。

「カレブ通信」には、現代のカレブとして歩む人々のさまざまな日常の物語りが綴られています。

1 各地カレブの会の予定

- 東京カレブの会 5月14日(火) 本田英一さま
18時から OCC会館 402号室にて
本田英一さまからのお話しです。テーマは「仕事と人生」
- 宇都宮 カレブの会 5月4日(土) 午後2時から シャロームにて
マルコの福音書から、イエスの生涯の分かち合い
- 仙台カレブの会 5月18日(土) 午後2時から 根田宅にて

2 メンバーのミニ報告

根田裕道

仙台カレブ会も2013年4月27日(土曜日)の開催で14回目になりました。この日は小川吾朗さんにも出席していただき、また東京から青木さんにもおいでいただき、祝福された会となりました。さて、小川吾朗さんより、小川徹さんと仙台カレブの会を立ち上げてはとの打診をいただき、2011年10月22日に小川徹さん、郁子さんご夫妻と私夫妻(根田裕道、景子)4人にて集ったのが始まりです。どのような展開になるか分からないけど、取りあえず我が家にあった茶道具を利用して、お茶会を催すことで会を進めることになりました。前回に投稿させていただきました通り、会の席では心を開いて交わる時を共有でき、神の御許で祈り分かちあえることができました。抹茶を立ててのお茶会は2012年の11月17日までの8回実施しました。その後、座敷に座ることが苦手な方も居られるとのことで、コーヒーとクラシック音楽を聴く会になり5回実施しました。

いずれの会も一人の方にメインテーマの今までの人生経験にてお話しできることをお聞かせいただきました。大変なことを経験された方も居られれば、素晴らしいご活躍をされた方のお話もありました。いずれを取っても御一人御一人の人生の重さが伝わってきました。

会には常に真ん中に神がおられました。誰がリーダーでもなく、誰が偉くもなく、誰も遠慮することもなく、でも経験、意見、考えを聞かせていただいたり、言わせていただいたり、その中には繕いもなく、虚栄もなく、なんとも言えない安心がありました。この安堵感は何なんのだろうか。初めてお会いした方も、もうずっと前から知り合っていたような。

そして、小川徹さんから次の御言葉をいただきました。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。(マタイ福音書 11.28~30)」

それぞれに喜びも、そして苦しみも悲しみも乗り越えて来られ生きてきた証をお聞きしました後に、祈り合いました。そして、この集いが神の御許で少しでもマタイ福音書の御言葉通りになる機会になっていると信じます。この会が神からの安らぎをいただいている時間であることを信じ、今後も継続して集っていきたいと思います。

3 カレブ ストーリー（1）

変えられた一瞬

東後勝明



東後勝明

1972 年から 1985 年まで NHK ラジオ「英語会話」の講師をされました。現在は早稲田大学の名誉教授、東京 YMCA インターナショナル スクールの校長をされておられます。

「主は私の羊飼い。私は乏しいことはありません。主は私を緑の野に伏させ、いこいの水のほとりに伴われ・・・」と、この辺までくると、ベッドの上に体を起こし、じっと聴き入っていた私に異変が起きました。体中が熱くなり、肩の力がすーっと抜け、目から大粒の涙がポロポロとこぼれ、誰かが後ろから軽く肩に手をかけられ「そのままでもいいんだよ」という声が聞こえてきました。神様と出逢い、変えられた一瞬でした。

東後勝明さまへの

お問い合わせメール：

bxj05537@nifty.com

ヤイタキ市左佐

私の生い立ち

誰の人生にも大きな転機が、思わぬ時に来るものです。私の場合は、高校二年の夏でした。父が酷暑の中消化器がガンでやせ細り、骨と皮になって息を引き取りました。その死の床で父は私を枕元に呼び寄せ、声をふり絞って「勝明、お前、出世しろよ」と言い、息を引き取りました。私は必死で父を揺り動かし「出世するとはどういうこと、偉くなること?? お金をいっぱい儲けること? 有名になること? 地位を得ること? それとも権力を持つこと?」矢継ぎ早に訊ねました。しかし父はその問いには答えず、息を引き取りました。

その時から、私の心の中ではなんとなく出世をするためには「とにかく頑張らなくては」「なんとかしなくては」という思いが支配し始めていました。この思いがさらにエスカレートをして「このままではいけない」と異常なまでに私を駆り立てるようになり、いつしかかなりふりかまわず出世街道に身を投げ出して行きました。待望の大学進学も果たし、大学院進学から英米への三度にわたる留学と、事はトントン拍子に進み、帰国後は母校の早稲田大学の教壇に迎えられる、大学教授への階段を着々と上りつめたのでした。

さらに放送の仕事との両立を図り、すべては順風満帆と思われました。しかし、ふと自分の最も身近なところに目を注いでみると、子供は不登校になり、何かもっと大切なものを見失っているように思えたのです。家族の信頼関係が大きく揺らぎ始めていたのに、そこに気づいていなかったのです。寝苦しい夜が続き、頑張れば頑張るほど、深みに落ちていくようなあの無力感と焦燥感。「自分はこんなに頑張っているのに。なぜだ??」この大きな疑問符が私の前にどかっと立ちふさがったのでした。

相次ぐ試練

そうこうしているうちに、さらに試練はその手を弛めることなく襲いかかってきました。その年の夏、家内が募る疲労とストレスからくも膜下出血倒れ、幸い 12 時間に及ぶ大手術ではありましたが九死に一生を得ました。一方娘の不登校は一進一退を続けていました。そして遂に、私は人生の決定的瞬間を迎えるに至りました。それは 1994 年 11 月 16 日のことでした。その日は私の 56 歳の誕生日。午後の定例教授会の席上で突然ものすごい貧血に襲われ、その場にうずくまってしまいました。意識はもうろうとし、やがて失神。救急車で近くの病院に搬送されました。なかなか原因がつかとめられず、腹腔内の動脈からの出血は止まらず、一時は騒然となり、即開腹手術というところまで行きましたが、不思議なことに出血は自然に止まり、そのまま病室へ戻され、手術がまぬがれた安堵感で、朝までぐっすりと眠ってしまいました。

翌朝家内の所属教会の牧師の来訪を受け、ベッドの上の私に聖書を読み、祈ってくださいました。その時の聖句の箇所は、後で分かったのですが詩編の 23 編でした。私にとって生まれてはじめて耳にした御ことばであったのもかわらず、ぐいぐいと心の深いところに迫ってきました。「主は私の羊飼い。私は乏しいことはありません。主は私を緑の野に伏させ、いこいの水のほとりに伴われ・・・」と、この辺までくると、ベッドの上に体を起こし、じっと聴き入っていた私に異変が起きました。体中が熱くなり、肩の力がすーっと抜け、目から大粒の涙がポロポロとこぼれ、誰かが後ろから軽く肩に手をかけられ「そのままでもいいんだよ」という声が聞こえてきました。神様と出逢い変えられた一瞬でした。

4 カレブ ストーリー (2)

贖罪

内田雄一

カンボディアに 13 歳の少女がいる。首都のスラムに家族 6 人と一緒に住んでいる。弟妹が 4 人いる。うち 3 人が義理の父の子どもだ。少女を含め 5 人の子を産んだ母は娼婦だ。離婚して勤め先のバーに寝泊まりしている。同居している父の母は、最初から息子の嫁を嫌っていた。「家の恥辱だ。顔を見たくない」という。少女の母は天涯孤独だ。子どもに会いに来る。その都度、祖母に面会料 2 千円を払う。

ポリスである父の月給は 1 万円だ。母は月に 2 回ほど来て、子どもを抱きしめ、ダッコする。週 1 のお金を祖母に払う余裕はない。母は決して悪い女性ではない。けれど、たとえば、悪性子宮癌になったとき、長女を売るしかない。母は大泣きに泣く。娘も泣いて親孝行を徳とする仏教の教えに従う。貧しい。

何とかならないかと思い、少女が日記を書き、その日記 1 日につき 1 ドルを少女に払うことにした。月に 30 ドル、3 年で千ドル以上になる。毎月 15 ドルを貯金する。大学生 2 人に月 50 ドルでチューター役を引き受けてもらい、現地の親友にそのとりまとめをお願いした。チューターのひとりが、頼まれもしないのに、少女に週 1 英語を教え、日記を英訳して送ってくれる。1 カ月以上経過した。少女の日記の取り組みは、幸い、意欲的になる一方だ。

このことには、見過ごせない以下の個人的な理由がある。昨年カンボディアでイタリア人のお医者さんふたりに会った。それぞれアフガニスタンとケニアで医療奉仕活動を体験済みだった。「なぜ、するのか？」の問いに、「医者としての義務だ」と。自分も義務がほしいと思った。

より私的な事情もある。罪意識からの解放だ。凶器としての過去（現在でなければ幸いである）への免罪符がほしい。非キリスト者にそれがあるわけがない。警報にはふれないが有罪である。人を傷つけてきた過ぎ去った日々をどう償えばいいのか。悔いて、たとえ神に赦されたとしても、被害者には無意味だ。加害者が勝手に贖罪されても、傷つけられた人はどうなるのか。少女への学習生活支援は代償行為だ。ひとときの気晴らしだ。贖罪ができないまま、だからといって無為のまま、ソフトランディングを望むのは卑怯だ。「善人なほもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」、そうだとしても、悪に泣かされた人への救済とはなにか。

突破口を「善き行い」に求めて、マザー・テレサの超末席にもぐりこもうとする。義務を越えて使命になれば、と、望んでいる。義務は放棄できるが、使命を放棄したら、人をやっていられない。他者救済にかこつけて自己救済を願う。エゴイストだ。他人を助けることで自分を助けようとしている。人助けを思うだけでも、祝福に値する、と、言ってくれたキリスト者もいた。この祝福も自己満足の私小説になりえないか。加害者は被害者を救済できるのか。人様に切り刻んだ傷を放置して、ひとり赦されるわけがない。少女が日記に書いてくれる、「日本のおじいちゃんありがとう」に救ってもらっている。月 1 万円でもホットできる。貴重な安い買い物だ。

「告白しなさい、理屈ではない」。告白できないのも理屈ではない。理屈をこねても夜は明けない。朝はこない。だから「信仰の賭け」には誠実、真剣でありたい。カンボディアの貧しい処女が、贖罪、自己救済への「出会い」になってくれた。



内田雄一さん

昭和 14 年、東京生まれ。フランス、イタリア、コロンビア政府給費留学生、主に社会学を学ぶ。平成 17 年、玉川学園大学を定年退職。90 余ヶ国をまわる。救済に興味あり。(求道中)

このことには、見過ごせない以下の個人的な理由がある。昨年カンボディアでイタリア人のお医者さんふたりに会った。それぞれアフガニスタンとケニアで医療奉仕活動を体験済みだった。「なぜ、するのか？」の問いに、「医者としての義務だ」と。自分も義務がほしいと思った。より私的な事情もある。罪意識からの解放だ。凶器としての過去への免罪符がほしい。非キリスト者にそれがあるわけがない。警報にはふれないが有罪である。人を傷つけてきた過ぎ去った日々をどう償えばいいのか。

内田雄一さまへのお問い合わせ先メール

yuichiuchida0312@yahoo.co.jp

豊島区在住

